

『クループスカヤと図書館事業』

—1920—30年代におけるソビエト図書館運動—

長 島 七 穂 (訳注)

はじめに

『クループスカヤと図書館事業』 O.S. チュパリアン著 (訳)

ソビエト図書館事業の創始者
 新しい社会の新しい図書館
 ソビエト図書館の教育的役割
 図書館事業の組織化の諸問題
 単一制度としての図書館網
 世論の参加による図書館活動
 クループスカヤの図書館論と今日の課題

原注および訳注

参考文献

はじめに

ソ連の図書館学関係の文献を見て、まず驚かされるのは、図書館とは何か、図書館員とはどのような役割を担うものなのかというようなきわめて総論的、原則論的なものが多いということである。勿論、そこには図書館技術論的なもの、具体的な社会学的調査にもとづく論文、又、情報化社会という趨勢を反映して、情報機関としての図書館論もみられる。しかしソ連では、アメリカ流のプラグマチックな図書館学が主流の我国とは異って、執拗なまでに、しかもシニカルな態度でなしに、このような図書館論がくり返し語られているのである。それは一体、何に基礎を置くのかという問から発して、ソビエトの図書館をとらえる一助になればと考えて、ソビエト図書館学の基礎を築いたとされているレーニン夫人のN.K.クループスカヤの図書館事業に関する論文を翻訳、紹介してみることにした。

ナジェージュダ・コンスタンチノヴナ・

クループスカヤ(1869年2月26日—1939年2月2日)はペテルブルグの進歩的インテリゲンチヤの家庭に生まれ、帝政ロシアにおいて展開されていたナロードニキヤ、L.トルストイ等の文化啓蒙運動の影響を受けて、教師となった。1890年代に入り勢を増して来た革命的学生運動に加わり、マルキストとしての自己形成を行った。1891年から1896年、ペテルブルグのスモレンスキー夜間日曜学校で、勤労大衆を相手に、一般教育と共に、政治啓蒙活動を行っていたが、革命運動の昂揚の中で、その弾圧に乗り出した皇帝政府によって逮捕され1896年～1901年、シベリアで流刑生活をレーニンと共に送った。1901～1917年にかけては、1905年革命の頃、一時帰国したのを除き、ミュンヘン、パリ、ジュネーブ等で亡命生活を送っている。この期間に、西欧、米国等の教育学、教育事情を研究し、1915年には亡命先のジュネーブで、主著「国民教育と民主主義」を著わし、マルクス主義教育学を理論化した。1917年、2月革命によっ

て、専制支配が崩壊して後、ロシアに帰国し、ここから、革命前の理論的、実践的経験をふまえて、文化・教育分野の指導者としての生活に入って行く。十月革命前は、ペトログラードのヴィボルグ地区議会の代議員となり、文化・教育部を指導し、十月革命によって、ソビエト政権が樹立された後は、教育人民委員部に属し、その翌18年には、人民委員会議の校外教育部門を担当して、ここに訳出した論文にもあるように、図書館活動も含めた、文化啓蒙の分野で、指導者としての活動を展開していった。

戦争の荒廃の中で樹立され、1920年まで、反ソ勢力との国内戦を闘ったソビエト政権の1920年代、30年代には、多くの課題があった。その一つは、「共産主義—それはソビエト政権と電化である」との標語に象徴されるような、経済復興、農業国から工業国への転換であった。工業は戦前の1/7、農業は1/2と低落した中で、経済復興をなしとげるためには、一時的に私的所有を認め、資本主義を許容するという新経済政策を1921年より施行せざるを得なくなった。これにより、経済は立ち直りを見せていったものの、思想、教育面でのブルジョアイデオロギーの復興という問題が出現した。教育人民委員部に、政治教育総局が1921年に設置されたことも、こうした事情と無関係でない。レーニンの死(1924年)後、遅れた農業国であるロシアの社会主義建設は、ヨーロッパの先進国の革命によって支えられない限りは成功しないとされていたものが、スターリンの登場により、一国社会主義論として打ち出され、産業の復興、重工業化、農村における集団化等が、第一次五ヵ年計画(1927-32年)、第二次五ヵ年計画(1933-36年)として強硬に施行され

ていった。クループスカヤの活動した時期は、こうしたきわめて波乱に富んだ時期であった。

ソビエト政権にとってのもう一つの重要課題は、いかにして勤労大衆の教育・文化水準、科学・技術水準をひき上げ、社会主義建設の強力な担い手を作り出すかということであった。それはまず、専制政治の下で放置されていた文盲(19世紀末、ロシア全体では73%が文盲であり、1926年の国勢調査では49.9%)の全国的清算運動の着手であり、又普通義務教育の完全な実施、成人に対する文化・啓蒙教育の展開であった。クループスカヤが、大衆図書館活動、農村図書館活動に力を注いだことには、このような時代的背景があった。

ところで、クループスカヤはソビエト図書館学の創始者とされているが、彼女の図書館事業についての論文集から受ける印象では、体系だったものというより、現実の課題に則した生きた記録としての性格が強い。しかしその中でも特徴的なこととして、ここに訳出した論文が指摘しているのは、図書館と図書館員の果す教育的機能が、社会主義建設運動の重要な一要素として明確に規定されていること、単一の図書館網の設定の必要性和方法が述べられていること、積極的な図書館事業の推進のために、住民自身の参加が要請されていること等である。が、これらのうちでも、第一の教育的機能が最も重要な原則として強調されている。権力の獲得のための闘いの中で、又、クループスカヤの活躍した時代的背景の中では、それは新しい原則であったといえよう。しかし、革命後半世紀を経た今日、いまなお原則として主張され続けていることの意味を、記者としては考え込んでしまふものがあつた。又、こうした原則の上で

の住民の参加とは、上からの統制としてではなく、「下からの統制」として、どのように生きたものとして保障されるのか等については、この論文の訳出によっても、明らかにできなかったことは、遺憾なことであった。

なお、訳出した論文「クループスカヤと図書館事業」は、1969年“ビブリオテカリ”(図書館員)誌2号(クループスカヤ生誕100周年記念号)に掲載されたものである。O. S. チュパリアンは、当時のレーニン名称国立図書館副館長であり、ソビエトの代表的図書館雑誌「ソビエト図書館学」の編集長を1964年から74年にかけて勤めた、ソビエト図書館学の代表者の一人である。

——クループスカヤと 図書館事業——

O. S. チュパリアン

ソビエト図書館事業の創始者

十月社会主義革命直後の20年間におけるソ連邦の図書館事業の発展は、共産党および、ソビエト国家の優れた活動家であったナジュージュダ・コンスタンチノヴナ・クループスカヤの名と切り離すことはできない。1917年から1939年にかけて、彼女は、はじめは人民委員会議の校外教育の政府委員として、次いで、中央政治教育局長として、^{訳注①}さらには、ロシア共和国の教育人民委員部の次官として、わが国における図書館活動も含めた、^{訳注②}あらゆる文化・啓蒙活動の先頭に立ち、組織活動、および理論活動に大きな働きをした。

ソビエトの図書館政策が、新しい社会的条件の下で形成され、実施されていったこの20年間は、図書館事業の歴史において、

非常に重要な時期であった。ソビエト政権のきわめて初期に、V. I. レーニンは、社会主義社会における図書館事業建設の根本的に新しい綱領を立案した。(《ペトログラードの公衆図書館の任務について》、《教育人民委員会へ》、《教育人民委員部の活動について》^{訳注④}等々)。1920年11月に《ロシア共和国における図書館事業の中央集権化について》^{訳注⑤ 訳注⑥}という人民委員会議の法令が發布された。この法令は、N. K. クループスカヤによって準備され、レーニンの直接的な協力を得て、レーニンの署名も付されている。ソ連共産党中央委員会は、《農村の図書館、及び、図書館が供給する大衆の文献について》(1925年)、《読者大衆への図書サービスについて》(1928年)、《図書館活動の改善について》(1929年)、《自己教育活動の改善について》(1933年)等々の決議を採択した。ナジュージュダ・コンスタンチノヴナが準備に加わった中央執行委員会の決議《ソ連邦における図書館事業について》^{訳注⑧}も、1934年に採択されている。

N. K. クループスカヤには、図書館事業に関するレーニンの遺訓や、党の指令を、具体的に実践する活動の組織者として、功績が多い。彼女は、その著作や発言の中で、図書館政策の本質を明らかにした。また、ソビエトの図書館を、社会主義型の図書館として特徴づけている重要な原則的立場や、文化革命という条件下での具体的な図書館事業の組織形態などを追求し、根拠づけたのである。さらに、幾百万の国民に対する図書サービスの豊富な経験を一般化している。

クループスカヤは、(組織者として、あるいは、講演者として)初期の国民教育、校外教育、政治啓蒙活動等に関する会議の準備と実施に、積極的に関わっていた。ナ

ジェージュダ・コンスタンチノヴナの発議と、参加により、ソ連の図書館史において画期的なできごとである1924年の第一回全ロシア図書館大会が、召集された。彼女の直接的参加の下に、図書館の強化を目指す大衆的社會運動が開始された。図書館事業の発展の上で、重要な道標となっているのは、N.K. クループスカヤによって準備された「図書館学および書誌学の理論的諸問題に関する全ソ連邦協議会」である。ここで、彼女は「図書館事業に関するレーニンの指令を遂行しよう」という基調報告を行っている。ナジェージュダ・コンスタンチノヴナは、図書館員教育が、専門的図書館員育成の最も重要な基盤であるとして、図書館員教育の組織化、設置構想に、非常な力を注いだ。クループスカヤは、その晩年に至ってもきわめてはりつめた活動の日々を送っていた。その最期の数ヵ月に、雑誌「赤い図書館員」創刊15周年を記念する図書館活動家協議会での講演、〈コンソモリスカヤ・ブラウダ〉紙に寄稿されたM.E. サルティコフ・シエドリノ名称国立公共図書館125周年の記念記事の執筆、レニングラード図書館高等専門学校における学生との会談、第三次国民経済発展五年計画の検討、党上級学校における〈プロパガンディストおよびアジテーターとしてのレーニン〉と題する講演等を行っている。

新しい社会の新しい図書館

N.K. クループスカヤの指導によって、わが国では、〈新しいタイプの図書館の設立〉という大事業が遂行された。彼女は次の様に述べている。「我々は、本質的に全く既存のものとは異なるタイプの我々の図書館を建設し、より実際の、我々の社会主義体制にふさわしい新しい体系を採用し

て行かなくてはならない」(註1)。このようにしてナジェージュダ・コンスタンチノヴナは、十月社会主義革命の勝利、および労働者の生活と活動の条件の根底的な変化によって、ソビエト国家の発展と、その政治的・経済的・文化的課題と緊密な関わりを持っている図書館というものへの新しい社会的要請が生まれて来たことを強調したのである。

N.K. クループスカヤは、社会主義社会の大衆図書館の特性、課題を規定した。「わがソビエトの大衆図書館は、官僚的機関になることはありえないし、なつてはならない。それは生き生きとした文化の中心でなくてはならない。そのためには、図書館員には、大衆に近づき、大衆と共に学び、大衆の要求を知る能力、さらに、大衆の関心に一定の方向づけを与え、読者の自発性を呼び醒まし、彼等の中で指導的活動を行う能力が要求される」と、彼女は書いている(註2)。

N.K. クループスカヤは、V.I. レーニンの見解、および党の指令にもとづいて、ソビエトの図書館がブルジョアジーの図書館と根本的に異なる点は、図書館活動の上での、思想的内容にあるということを強調して、「図書館を——最も小さな図書館をも——社会主義建設事業に力を借す、イデオロギーの中軸に転化させなければならない。図書館を単に読者と結びつけるのみでなく、文化・党・経済・労働組合等のあらゆる組織と緊密に結びつける必要がある」(註3)と述べている。正にこうした要請のうちに、ソビエトの図書館政策の核心、社会における図書館の役割に対する根本的に新しい視点、社会主義文化の本質的部分としての図書館事業を進展させる具体的な活動方針があるといえよう。

《図書館をイデオロギーの中心機関に転化させる》という課題を実践的に解決するためには、大規模な組織活動を行うこと、きわめて合理的な方法を探求することが必要とされたのである。この際、無視できないことは、ソビエトの図書館の形成が、図書館の本質や機能に関するブルジョア民主主義的な見解という過去の残滓との闘いを通じて行われたということである。(例えば、図書館の階級的役割への無理解との闘い、図書館の活動を党の政策と結びつけることに反対する見解との闘い、等々)。こうした見解を克服するために、クループスカヤは綿密な、徹底的な分析をもとにして、社会主義社会の図書館としてのソビエトの図書館活動の基本的特質、および方法を精細に示したのである。

ソビエト図書館の教育的役割

N. K. クループスカヤは、積極的な教育課程として、ソビエト図書館の活動をとらえていた。《ヴラジミール・イリイチ・レーニンはある時、我々が直面している課題は、大衆を、革命的世界認識に向け、又、革命的活動に向けて不断に育成することである、と語った。図書館員は、革命的世界観が広範な大衆の間に形成されるよう、あらゆる援助をしなければならない》注(4)と書いている。ナジェージュダ・コンスタンチノヴナは、図書館の主要な目的とは、労働者の共産主義教育を援助することであり、彼らを、科学および文化の業績に関わらせることにあったとした。図書館の思想教育活動に関する諸問題を提起し、解決するにあたって、彼女はマルキシストの教育学者として臨み、図書の宣伝・普及活動の内には、民衆の教育・啓蒙の強力な源泉となりうる可能性があるとして、この活動に大き

な価値を認めた。

レーニンの遺産、および党の文書には、ソビエト図書館の重要な特性として、図書館のあらゆる活動は、国の経済的、政治的、文化的な課題に従属するものである、と記されている。N. K. クループスカヤの具体的な助言には、図書館の諸活動を、人々の生活と、共産主義建設の實踐と、人民大衆の興味や関心とに結びつける方法が示されている。こうしたことを彼女は、図書の宣伝・普及活動、読者への推薦図書の選択等の思想的内容を判定する手がかりとし、又、図書館が有効に機能しているか否かを評価する基準としていたのである。

N. K. クループスカヤの功績の一つとして挙げられることに、図書館活動を、教育課程としている活動、即ち、読書指導という重要な問題を提起し、究明したということがある。彼女は、読書指導とは、《読者を遠ざけてしまうような配慮としてではなく、巧みなアプローチとして》の図書のプロパガンダであるとした。こうした読書指導にこそ、読書の内容および性格に対して、目的にかなった作用を与えるという図書館の教育的過程があると見なしている。《図書館とは、最良のかつ必要な図書を、広範な大衆に供給する組織者であり、読者が必要な図書を選択する場合の助け手であり、系統的な読書に関する助言者である》注(5)、とナジェージュダ・コンスタンチノヴナは書いている。つまり、ソビエトの読書人の形成、および、書物という宝の人民による効果的利用ということについて、指導的役割を演ずるのが図書館であるということになるのである。彼女のこの命題の重要性は、実践によって証明されている。例えば、最新の社会学的調査によると、現在では、読者の図書に対する請求の内、60—

65%までもが、図書館員の推薦や、参考書誌的情報源（目録、図書の展示会、書誌的照会、索引、抄録等）をもとにした図書館の直接的な影響によって生じてきているとされている。今後さらに、共産主義建設の進展と労働者の精神的要求の向上によって、図書館のこの役割が、ますます増大していくだろうことは疑うべくもない。

図書館活動の教育原理の創造という観点からいって、N.K.クループスカヤの、図書の宣伝・普及活動および読書指導には総合教育的特質があるという見解は重要である。たとえ職業教育であろうとも^{訳注⑥}労働者に、その労働者が働いている産業全体に関する知識をさすげなければならないし、その産業の世界市場における役割をも、完全に教えなければならない。又、労働者の専門分野を、科学の光にあて、この生徒に、物理、化学、自然科学一般を教え、その生産部門の歴史を、労働の歴史、文化史、と結びつけて語ってやる必要がある。さらに、この時代を、経済的・政治的側面からも明らかにしなければならない……》と彼女は考えていた。《一言で云えば、職業教育とは、純技術的技能と共に、広い視野と、産業の発達条件に関する知識をさすげるものでなければならない。それは、生活の主人公であり、社会的富の創造者である労働者にとって不可欠なものなのである。しかし、企業の側からは、このようなことは、賃労働者にとって、およそ不要なものであると、かつてはみなされていたのである》^{註(6)}。

ソビエトの図書館には、図書の宣伝・普及活動および読書指導というきわめて貴重な経験が蓄積されて来た。つまりソビエトの図書館は、読者に思想教育を行い、唯物論的世界観をさすげること、総合技術教

育を行うこと、労働者に専門的知識と、先^{訳注⑦}進的な生産経験を与えること、等の役割をになってきた。N.K.クループスカヤの遺産の内には、図書館活動の内容や方法に関する上記のような有益な具体的な助言や見解を数多くみることができているが、その内でも、V.I.レーニンの著作に関する作業について、図書館員に、とりわけ貴重な助言を与えている。ところで図書館活動の様々な任務を、彼女は決して個々バラバラのものと考えていたのではない。図書の宣伝・普及活動や読書指導の過程において、種々の学問分野間にある有機的な関連性を明らかにする必要性を強調したのである。このような図書館の宣伝・普及活動に対する態度は、社会主義社会における個人の全面的発達を重視している党の立場から生じて来ているものでもあり、系統的な自己教育的読書^{訳注⑧}というものにふさわしいものであるといえる。

N.K.クループスカヤは、図書館とは、自己教育を援助する諸活動、つまり、きわめて大衆的な型態の人民の教育を、労働者の間に繰り広げるための素地、として扱っていた。彼女は、《本なくして、又、それを利用できる可能性なくしては、自己教育活動は、発展しえない。図書館事業の発展は、自己教育活動が大衆的な規模で発展してゆくための、不可欠な前提である。それ故に、自己教育活動が、図書館の活動と密接に関わるようになり、図書館の下に、自己教育の広範な指導活動が行われるようになるだろうと考えられるのである》^{註(7)}。

現代的課題でもあるということから、注目に値するのは、ナジェージュダ・コンスタンチノヴナが、新刊紹介書誌の役割に関心を向けていたということである。彼女は、これをその時代の文献に読者や図書館

員を近づけるための特別な参考書として見ていただけでなく、図書の宣伝・普及活動、読書指導、ソビエト読書界の形成、のための重要な方法とも考えていたのである。

クループスカヤは、読者への個別的働きかけが、個々の読者の興味や要求を考慮しながら、その読者に必要な本を効果的、かつ積極的に勧めることを可能にするものであるところから、これにとりわけ大きな意義を認めている。それと同時に、ナジェージュダ・コンスタンチノヴナは、図書の大衆的宣伝・普及活動は図書の紹介、推薦という役割も引受けなければならないと考えた。それによって、読書の内容や本の選択に対して影響を与えると同時に、様々な集団に属する人々の関心を、現代の現実的諸問題に向けることができるし、読者に良書に関する情報を活発に提供することができるとしたのである。

図書館の思想教育活動は、その図書館の活動地域の全住民を対象として展開されなくてはならない、というクループスカヤによって提起された命題には、深い意義がある。《我々の目の前には、読者に奉仕するだけではなしに、全住民に奉仕するという課題がある。これは何を意味するのだろうか？これは、即ち、個々の図書館員の関心が、すでに図書館に通って来ている人々に対してのみでなく、図書館に登録もしていなければ、訪れても来ない人々を、どのようにして図書館にひきつけるか、ということにも向けられなければならないということである》注(8)と、彼女は書いている。この命題は、35年前に述べられたものではあるが、いまだにその意義を喪失していない。図書館がその勢力を拡大して行っているのは、その活動が《図書館という建物》の枠内に閉じこもることなく、全住民の間

に、全産業組織の間に、広がっていつているからである。

図書館事業の組織化の諸問題

ソ連国民に対する図書館サービス制度の形成においても、N. K. クループスカヤは非常な貢献をしている。

十月革命の勝利後、即ち、書物という宝が人民の共有財産となった時に、まず第一に前面に出てきたのは、図書館建設の組織問題であった。《書物が、数万人の人々に読まれていた頃は、図書を読者に提供することは、比較的容易なことであった。しかし、数千万もの人々が本を読む時代となつては、図書を提供するために、適切な組織化を行うことが、重要なことになってくる》注(9)、とナジェージュダ・コンスタンチノヴナは書いている。ここには、図書を扱う活動の内容や課題、目的と密接な結びつきのある組織問題の意義への、レーニン主義的理解をみることが出来る。

N. K. クループスカヤは、図書館事業の組織化の基本構想作りにも努めた。《様々なタイプの図書館から成る網の目がはりめぐらされて、全住民に対して必要な本を提供し、増大の一途をたどる大衆の知識に対する要求を充たし、図書館活動の範囲を押し広げて、人々の要求に答えてゆく、そのような図書館事業がソビエト国家に打ち建てられなければならない。—こうしたことが、レーニンの遺訓である》注(10)と述べている。

ナジェージュダ・コンスタンチノヴナは、図書館網の拡大にも力を注いだ。図書館事業の組織化は、国家的な大課題であり、この課題がうまく解決されれば、文化革命の一つの重要な前提が創られることになると、クループスカヤは述べている。こ

れに関連して、触れておきたいのは、図書館問題に関する、鋭い根源的な発言をN. K. クループスカヤが党中央出版物においてしていることである。例えば「図書館をコルホーズに」^①「知識、科学を日常生活の構成分子に転化させよう」^②「社会主義建設の重要部門」^③「第17回党大会に向けての図書館活動」^④「図書館が必要である」^⑤等々の論文を発表している。彼女は、その著作活動、および組織者としての活動において、図書館建設の、あらゆる問題に関心を寄せていた。なかでも、大衆図書館の発展と強化、農村住民を対象とした図書館サービス活動の組織化、青少年に対する図書館活動、等の諸問題に、特別の注意を向けている。

ナジュージュダ・コンスタンチノヴナは、常に大衆図書館の指導的役割を強調していた。というのは、大衆図書館は、国内のあちこちにあつて、住民に近い存在であったからである。大衆図書館網を優先的に発展・増強させるという路線が、いかに正当なものであったかは、実証ずみのことといえよう。現在、大衆図書館の数は、約13万にも達し、ソ連邦文化省の大衆図書館だけをとってみても、利用者の数は6千500万に達している。

N. K. クループスカヤは、農村の図書館サービスの組織化を重視していた。彼女は、農村図書館の発展が、都市と農村の格差を解消し、農民大衆を、積極的な政治、経済、文化生活に向かわせる一つの重要な条件となると考えていた。

ソビエト政権の初期に、ナジュージュダ・コンスタンチノヴナは、農村図書館網の発展に力を尽している。これは、農村における総合的な文化・教育機関であつて、農民を書物に親しませる施策がはじめて、この機関によってとられたのである。その

後、物質的基盤の拡大に応じて、農村には、常設の農村図書館網が形成されていった。つまり、これが、コルホーズ農民に対する図書サービスの主導的立場を占めることになったのである。農村の図書館が、広大な地域に創られるにしても、住民地区（小さいものでは部落のようなものからコサックの大村にいたるまでの）において設立されるにしても、この事業は、多くの困難をともなっていた。農村図書館網の強化に向けられたクループスカヤの努力によって、これらの困難は克服され、農村の文化的発展という課題が解決されていった。図書館事業の普遍的原則、組織化の問題に組みながらも、彼女は、農村図書館の建設と機構、農村図書館の任務の特殊性、読書にコルホーズ員を引きつける方法、農村における必須図書の性格等についても、幾多の方法論的、具体的助言を行ったのである。

N. K. クループスカヤは、児童に対する図書館サービスの組織化に特別な関心をはらった。ナジュージュダ・コンスタンチノヴナは、児童への読書指導という方法によって、青少年の共産主義教育という普遍的課題を解く「教師の役割を担う機関」として、あらゆる種類の児童図書館を把えていた。これに加えて、彼女は、学校と図書館の緊密な協力が不可欠であるとし、この両者の理想的な結合型態を示唆している。

マルクス主義教育学者として、N. K. クループスカヤは、児童への読書指導および、年齢的特性に応じた児童への個別的接近等の基本的原則を究明し、児童に対する図書館サービスの方法論を、あらゆる側面から研究した。ソ連邦のいたる所に支部を持つ青少年に対する図書サービス体制が設立された（現在では独立した児童図書館だ

けでも5千を上まわる) ことについても、ナジェージュダ・コンスタンチノヴナの功績は大きい。

単一制度としての図書館網

レーニンの遺訓によって、グループスカヤは、図書館網とは、単一制度でなければならぬとみなしていた。また、この単一性は、個々の図書館のタイプや、その所属官庁の相違にかかわらず、何よりもまず、あらゆる図書館の目的が共通していることによって明かであると、強調している。つまり、大衆図書館と学術図書館の相違、それらの類型的特殊性を認めながらも、すべての図書館が、人民の共産主義教育に努め、書物という財産を、共産主義建設のために用いている、との前提に立脚していたのである。

あらゆるタイプの図書館網が、急速に発展してゆくという事情の中にあつて、図書館制度の単一化という理念を実現するには、組織上の諸問題が、とりわけ重大な意義を持っていたのである。ここに、N.K.グループスカヤが展開した三つの命題を抜き出してみよう。1) 所轄官庁によるセクションナリズムの排除、および、国家的な規模において、図書館のフォンドを広く相互利用するための組織化、2) 全国民、全産業団体に対して、より完全な図書館サービスを与えることを目的とし、図書館の所属官庁のいかにかわりなく、図書館を国内に計画的に配置すること、3) 国民に対する図書館サービスの統一計画の作成、および、学術図書館と大衆図書館間の緊密な相互援助。これらの命題を実現するには、パラレリズム(諸機関の間における業務の重複、不合理な機能分担—訳者注)を斥けなければならぬかつ、単一のソビエト図

書館システムを創り出すことに関して、あらゆる官庁、組織の整然たる足並みの揃った活動が行われなければならぬのであつたのである。しかしながら、現在この事業はかなりの成果をあげているとはいえ、官庁のセクションナリズムという残滓が、完全には一掃されていない。いまもって、そここちに、図書館の配置、蔵書(の質、構想)に関してパラレリズムがみられたり、図書館間相互貸借制度にもとづく圖書の貸出しが、ある特定種^{訳注の}の図書館の間でのみ行なわれている、等々のことがみうけられる。

図書館事業を中央集権的な、全国的な指導の下に置くという理念を、グループスカヤはかかげ、それを発展させた。この実現こそ、あらゆる図書館を単一組織に組み入れ、個々の図書館の活動を経済・文化建設という共通課題に向ける重要な必要条件であると、彼女は考えていたのである。彼女の参加によって、図書館事業の国家的指導・統制という任務が、次のようなものとして、形成されていった。1) 図書館の全国的ネットワークに対する直接的な指導と統制、2) 図書館の所属を問わず、あらゆる図書館の活動に対する国家的統制・管理、3) すべての官庁および組織によって実施されている図書館活動を調整し、組織的なつながりの中に組み込むこと。現在では、これらの任務を、ソ連邦文化省及びその諸機関が遂行している。

世論の参加による図書館活動

図書館事業の全国的指導を行う上での、一重要課題とは、勤労者の大衆組織も含んだ広範な社会層を、図書館を強化し、図書館活動を発展させる作業に引き入れることである、とナジェージュダ・コンスタンチノヴナは考えていた。彼女は、わが国で

は、図書館建設に世論が参加することは、国家によって支持され、奨励され、方向づけられていて、これはまた、ソビエト国民に対する図書サービスの組織化の重要原則の一つともなっている、ということ強調している。

N. K. クループスカヤは、かつて、文盲撲滅のために世論を動員する上で重要な役割を果たした文盲清算運動(クリトパホード)^{訳注⑧}の首唱者、組織者として活動した。この運動の後に、図書館闘争(1929年)^{訳注⑨}が、さらに、より優れた農村図書館をめざす競争(1935年)^{訳注⑩}が展開された。図書館事業の発展に世論が参加するというこの運動形態は、きわめて意義深いものであり、時の試練に耐えて、今日に至っても、活発に実践されている。これを例証するものとして、十月革命50周年を記念する全ソ連邦図書館公開審査を挙げることができよう。これには約30万の図書館が参加し、各共和国、州、地区、都市、農村の国民に対するより高度な図書サービスを目指すまごうかたなき競争となったのである。現在、図書館事業のさらなる向上を目標とした新しい競争が、V. I. レーニン生誕100年を記念して展開されている。

なお、ナジェージュダ・コンスタンチノヴナの、世論を図書館事業に参加させる方式についての他の助言も、今日なおその生命力を保っている。たとえば、図書館が国民の前に、定期的に報告書を提出することであり、「大衆を図書館事業の強化と向上の活動に引き入れる」^{訳注⑪}ことを目的として召集される図書館会議である。図書館の行う文化・啓蒙活動に積極的に参加するよう、インテリゲンチヤ、とりわけ農村のインテリに、何度も呼びかけを行ったが、これも実際の効果をあげたのである。

クループスカヤの図書館論と今日の課題

N. K. クループスカヤの多くの発言は、例えば国民に対する図書館サービスの中央集権化の問題の様に、今日においても、極めて現実的な問題に向けられていた。彼女は「大学図書館も、他の学術・専門図書館も」^{訳注⑫}含めて「どの都市においても、すべての図書館は、一つの共通のネットワークに結びつけられていなければならない」と主張した。さらに、サービスの中央集権化を現わす指標として、体系的・中央集権的な蔵書構成活動、総合目録の編纂、「読者が必要な図書を任意の図書館を通じて得ることのできる」^{訳注⑬}可能性の創出、等を指摘している。彼女の存命中にも、こうした企図を実現するいくつかの試みがなされている。(例えば、30年代のはじめにアレホヴァ・ズウエヴォ市において、図書サービスの支部システムの設立が企てられた。^{訳注⑭})しかし、当時はまだ、企画段階で意図されていたような、この革新的な意図を全面的に実現させようとする組織的・物的条件が整っていなかったのである。図書館建設、および図書館網の強化がなしとげられた現在、図書館サービスの集中化という企図(図書館網組織の支部システム)を、現代的課題に応じて実現するための必須条件は、もはや揃っていると考えられる。

N. K. クループスカヤの図書館事業の発展への貢献は、ソビエト政権の初期20年間という歴史的側面に限られるものでない。彼女の実践活動の経験、理論的遺産は、今日に至るまでもその意義を喪失することなく、ソ連邦における図書館建設の幾多の今日の問題の解決を助けているのである。

(小見出しは訳者による)

原注

- (1) Н.К. Крупская. О библиотечном деле. Сборник. (Н.К. Глубоуская, 図書館事業について, 論文集)。Москва, 1957, стр. 91 (訳注@参照)。なお, 以下の引用はすべてこの論文集からとったものであり, 論文, 又は, 講演の標題とページ(стр.)のみを示す。(なお, これらがはじめて掲載された新聞, 雑誌なども付記する)。
- (2) Важный участок социалистической стройки. (社会主義建設の重要な領域) Сб., стр. 310. (“Правда” 紙 1933年11月6日号)
- (3) По ленинскому пути. (レーニンの路をたどって) Сб., стр. 103. (“Красный библиотекарь” “赤い図書館員” 誌, 1938年 No. 1, стр. 8-10)
- (4) Краеведение и библиотека. (地誌学と図書館) Сб., стр. 393-394 “Красный библиотекарь” 1926年, No. 12, стр. 3-14)
- (5) О задачах всесоюзного конкурса на лучшую сельскую библиотеку. (よりよい農村図書館を目指す全ソの競争の課題について) Сб., стр. 237. (“Революция и национальности” “革命と民族” 誌1935年 No. 11, стр. 12-14.)
- (6) Внешкольное образование в новом строе. (新体制下での校外教育) Сб., стр. 113 (“Народное Просвещение” (国民教育) 誌 1918年 No. 4-5, стр. 74-76)
- (7) Реконструкция Наркомпроса и библиотечный фронт. (教育人民委員部の改編と図書館戦線) Сб., стр. 315. (“Красный библиотекарь” 誌 1933年 No. 6, стр. 2-5)
- (8) Речь на курсах конференции заведующих областными и краевыми библиотеками и библиотечных инспекторов ОблОНО. (州・地方図書館長 および州国民教育局図書館監査官の協議会での演説) Сб., стр. 354. (“Красный библиотекарь” 誌 1935 No. 2, стр. 8-10)
- (9) Книжные сокровища - широким массам. (書物という財宝を広範な大衆に) Сб., стр.

331. (同論文にはくソ連邦中央執行委員会決議が課しているもの>との表題が付され “Красный библиотекарь” 誌 1934年 No. 4, стр. 5-6 に所収)

- (10) Важный участок социалистической стройки. (社会主義建設の重要な領域) Сб., стр. 307 (脚注②参照)
- (11) Объединим усилия по улучшению библиотек. (図書館の改善のために力を結集しよう) Сб., стр. 291 (“Известия” 紙 1934年 7月5日)
- (12) Централизация библиотечного дела. Из отчета о работе Политпросвета Наркомпроса на сессии ВЦИК 23 сентября 1920 г. (図書館事業の中央集権化。教育人民委員部政治局の活動に関する1920年9月23日全国中央執行委員会会議における報告より) Сб., стр. 157.

訳注

- ① Совнарком=Совет Народных Комиссаров. 人民委員会議。現在では, Совет министров СССР, ソ連閣僚会議がその機能を果している。

1918年, クループスカヤは, 人民委員会議の校外教育担当の政府委員となった。

- ② Наркомпрос=Народный Комиссариат Просвещения. 教育人民委員部。現在のソ連邦の教育省, および文化省の母体となったもの。

1917年11月に, 憲法にもとづき, 各共和国に, 教育人民委員部が設置された。1945年まで, Наркомпрос は, 普通教育, 学外教育事業などを管轄した。

1917年11月に Наркомпрос に設置された校外教育局が, 図書館サービスのソビエト制度の建設を指導するようになった。はじめは, この局の 図書館担当班がこれにあっていたが, 1918年半ばに図書館事業部に発展し, ここで具体的な諸活動(目録の発行, 図書館員のための指導書の作成, 移動図書館の目録, 利用手引の作成, 図書館事業に関する指令の

配布等々)を行うようになった。

クループスカヤは、1920年 Наркомпрос の政治教育総局 (Главполитпросвет: Главный политико-просветительный комитет) の局長となった。Наркомпрос には、国家学者会議 (ГУС: Государственный ученый совет. 1919-32年) が組織され、その一部会として1921年に設立された教育科学部 (Научно-педагогическая секция) を指導した。

なお、クループスカヤは、第二代のロシア共和国教育人民委員 (А.С. Бубнов 1929-37年在任) の下で、1929年以来、次長 (日本でいえば、文部次官に相当する) をつとめた。

- ③ О задачах публичной библиотеки в Петрограде 1917年11月に執筆され、1933年の ленинский сборник (レーニン選集) に、はじめて印刷される。

『レーニン全集』26巻 p. 297

- ④ В Народный Комиссариат Просвещения 1919年2月に執筆、1933年、はじめて印刷される。

『レーニン全集』28巻 p. 429-430.

- ⑤ О работе Наркомпроса. <правда> 紙 No. 28, 1921年2月29日のレーニン署名論文。

『レーニン全集』32巻 p. 101-110

- ⑥ レーニンの図書館事業への基本的姿勢を示すものとして、ここに1918年5月6日の校外教育第1回全ロシア大会への祝辞としての発言を引用しておく。「われわれは読み書きのできるものを動員し文盲を退治するという、簡単な、緊急な問題にとりかからなければならない。われわれは、われわれのもっている図書を利用しなければならない。また組織的な図書館網の創設に着手しなければならない。これらの図書館は、わが国にある一冊一冊の本を人民が利用しようとするのをたすけるであろうし、また同系列の組織をたくさんつくらずに、計画に即した単一の組織をつくらうとするのをたすけるであろう。この小さな問題には、わが国の革命の基本的な任務が反映している。もし革命がこの任務を解決しないならば、また革命が、ロシアのばかげた混沌と不合理さのかわりに、ほんとうに計画

に即した単一の組織をつくる道に出ないならば、この革命はブルジョア革命にとどまるであろう。」(『レーニン全集』29巻 p. 334)

- ⑦ 《Декрет Совета Народных Комиссаров о централизации библиотечного дела в РСФСР, от 3 ноября 1920 г.》

1920年 11月6日 <известия> 紙, No. 249 に掲載。“Ленин о библиотечном деле”. (図書館事業についてのレーニン)。Москва, Госполитиздат. 1960, стр. 139-140. に所収されている。

なお、これはソビエト政権による図書館建設政策に関する初めての法律である。この法令によって、あらゆる図書館が、公開図書館となり、単一の図書館網に結びつけられることになった。

- ⑧ Постановление ЦИК «О библиотечном деле в Союзе ССР». この原文は、Л.А. Соловьева и М.Л. Хейфец. Материалы к истории библиотечного дела в СССР. (1917-1959 гг.) Учеб. пособие для студентов библиотеч. ин-тов. Ленинград, 1960, стр. 109-115 に所収。

この法令は、1920年11月3日発令の Совнарком の法令につづく、二番目の包括的な法令であり、ソビエト国内における文化の発展と、国内の新しい情勢に対応した図書館政策を打ち出すことをねらっている。図書館の公開性の実現、新しい種類の図書館創設、(とりわけ学校図書館、およびソホーズ図書館) の必要性、図書館の蔵書の質・量的改善、専門的図書館員の養成、図書館の物質的基盤の強化など多岐にわたって記されている。

- ⑨ 第一回全ロシア図書館大会: I Всероссийский библиотечный съезд. 1924年7月1日から7日にかけて、「イリイチ (レーニン) の遺訓を遂行しよう」とのスローガンをかけ、開催された。

この大会でクループスカヤは、「Библиотечная работа в деревне」(『農村における図書館活動』)(Сб., стр. 182-190 参照) という報告を行った。彼女はそこで、農村の図書館員は、社会活動家として、農村における政

治、文化生活の中心に位置し、図書の宣伝・普及活動を活発に展開しなくてはならない、又そのために地域の活動家を図書館に結集させなくてはならないと述べている。

なお、現在のソビエトの文献には出て来ないが、この大会における報告者の一人であった、L. トロッキーも報告『レーニン主義と図書館活動』を行っている。(現代思潮社、1970年刊、第2期トロッキー選集 16和田あき子訳『文化革命論』p. 167-191参照)、この中で、トロッキーも、図書館員とりわけ農村図書館員の文化啓蒙活動における役割を具体的に展開している。又、教育の党による独占ということに関してこう述べている。「わが国では啓蒙活動は、国家とその指導者——共産党の手中に独占されている。……革命の条件のもとでは、プロレタリア独裁の条件のもとでは、勤労大衆教育独占から一步でも後退することは死滅であったらう。われわれは、労働者階級と農民が自らの指導者——共産党とともに、世界ソビエト共和国の一部をなす社会主義的共同生活に溶け込むまでは、教育活動の独占を完全に無条件に強めていこう。——そのときは明日ではないが明後日、あるいは明々後日にくるだろう。」として、過渡的なものとして党による教育独占の必然性を述べている。しかし、教育独占の否定的側面、危険性として、「お役所主義、旧習墨守主義、形式主義」が生まれる可能性を指摘し、これを取り除くのは「教育消費者の、つまり下からの組織されたつねに生き生きとした突き上げによって。まさにそこで図書館員の役割が『農村図書室』の指導者の役割が、一般に文化の領域での下級活動家の役割が決定的なものになってくる」と述べて、図書館員とは「ソビエト文化体系における積極的な仲介人、きわめて価値ある梃子」であるとしている。

⑩ Всесоюзное совещание по теоретическом вопросам библиотечного дела и библиографии. (図書館学および書誌学の理論的諸問題に関する全ソ連邦協議会)は、1936年12月16日～27日にかけて開催された。クループスカヤは、この《Выполним указания Ленина о библиотечной работе》という報告

を行い、社会主義体制という新しい皮袋に適合した内容として「大衆により近い、大衆と緊密に結びついた、そして大衆自身が図書館事業をわが事と考える」ようなソビエト図書館を作り出す必要性を強調している。(Сб., стр. 89-109参照。これは、《красный библиотекарь》誌、1937年、No. 1, стр. 21-30にはじめて掲載された。)

⑪ 《Красный библиотекарь》(赤い図書館員)、クループスカヤが提唱し、1923年9月より発刊されているソ連の代表的図書館雑誌。図書館事業の理論、実践の諸問題を対象として、ソビエトの図書館分野における経験の普遍化の役割を果している。1941年までは“красный библиотекарь”と称されていた。大祖国戦争当時は、休刊され、戦後《Библиотекарь》(図書館員)と改題されて復刊となり現在に至っている。なお、これと同名の《Библиотекарь》という雑誌が、革命前のペテルブルグ図書館学協会(1908年—1917年まで存在)から、1910—1915年にかけて季刊誌として発行され、革命前のロシアにおける図書館学の発展の上に大きな役割を果したが、第一次世界大戦に入り、経済的困窮から休刊を余儀なくされた。

なお、ソビエトの図書館事業、および図書館学に関する雑誌、紀要の主要なものとして、《Советская библиография》(ソビエト書誌学)、全ソ連邦書籍院機関誌。1933年創刊。《Советское библиотечное дело》(ソビエト図書館学)。1952年に《Библиотеки СССР. Опыт работы》として創刊され、1967年、《Библиотеки СССР》として改題後、1973年に、今の形に改題された。

《Библиотечное дело и библиография за рубежом》(外国の図書館学、書誌学)、上記二誌は、国立レーニン名称図書館から発行されている。

《Научные и технические библиотеки СССР》(ソ連邦の科学、技術図書館)—ソ連邦国立公共科学技術図書館、1961—69年までは《Технические библиотеки СССР》であった。

等がある。

⑫ 《Белничшая библиотека мира》(世界に冠たる図書館), Сб. стр. 420-421. この論文は、1939年、1月14日の《Комсомольская правда》紙に掲載された。

⑬ 原文には комплексный характер. (総合的特質) とあるが、ここでは教育学の概念 комплекс (総合的方法), комплексный метод обучения (総合教育法): 課目教授法の対概念から、総合教育法的特質と訳した。

⑭ Политехническое образование. (総合技術教育), 総合技術教育とは、人間の全面的な発達を目的として、教育と生産労働とを結合させるものであり、すべての主要な生産部門についての知識を、理論と実践の上でさずけるものである。この理念は、レーニンによって提唱され、ソ連の学校教育に導入されるようになった。これは、1919年の党綱領に取り入れられて、当面の教育の任務として「義務的な普通教育、並びに総合技術教育を実施すること。教育と社会的・生産的労働の緊密な結合を実現すること」とされた。クループスカヤは、総合技術教育の理論化につとめた。彼女は、ブルジョアジーは、学校を階級支配の手段と考えるが、プロレタリアートは、階級支配を終らせる能力と全面的に発展した人格をそなえた人間を教育する手段とみる、との認識に立って、総合技術教育をブルジョア社会における職業教育とは異なる一般教育の本質的部分として理論的に位置づけた。

その後、この理論と実践との結合による学習の発展という課題は、ある時は狭い職業教育化・技能教育化に陥るなどの問題をほらみながらも、現在に至るまで、その実現の試みがなされている。

『クループスカヤ入門』ソビエト教育学研究会編、明治図書 p. 12-20 参照

⑮ Самообразование: 自己教育

сам (ひとりで、自分自身で) と образование (教育、陶冶、教養などの意) より成る。学校外で、又は、教師の援助なくして、自主的に知識を修得すること、つまり、個人あるいは集団による教育活動ということの意味する。クループスカヤも含めて、ロシア・ソビエトの文化啓蒙活動家たちは、自己学習と

いうものの、政治、教育、文化啓蒙活動における重要な役割を強調した。それは当時の勤労大衆が、学校教育の枠外に置かれていたこと、および社会体制の変化にともなう、新しい世界観を従来の学校教育とは別の所に求めていかななくてはならなかったという時代的条件とも無縁でない。

クループスカヤは、国民教育事業への住民参加の意義を、これが国家による教育の統制への根本的批判、国家統制に取って替るべき新しい統制形態であるとして重視していたといえようが、こう考えていた彼女において、自己教育とは、単なる「自学・自習」という意味以上の、勤労大衆自身が、新しい教育を獲得してゆくという下からの運動、という概念としてあったといえる。

⑯ изба-читальня (農村図書室)

農村図書室と訳されているが、図書室という範囲にとどまらないソ連邦における農村の文化教育施設の一つである。これはソビエト政権の初期に生れた。農村図書室の内容と方向性は、1924年9月18日の全露中央執行委員会と、ロシア共和国人民委員会議の指令によって定められ、次いで全ソ連邦共産党中央委員会の1929年11月の決議《Об избах-читальнях》(農村図書室について)によって定められた。20~30年代にかけて、これは農村における政治教育、文化・啓蒙事業の中心となった。農村図書室には、諸クラブがあり、講演会、討論会、コンサート、劇の上演、等々の活動も行われている。

これは、農村から文盲を一掃し、彼らを文化、知識へ接近させる上で、又、農村の集団化の実施においても、ソビエトや党機関を援助するなどの役割を果たした。

現在、農村クラブや、文化会館の壱頭にともなう、農村図書室の数は減少しつつある。1948年に、農村図書室はソ連邦に4万以上存在したが、1970年には

農村図書室	約 5,700
農村クラブおよび文化会館	79,300
ホルホーズクラブ	16,500

となっている。

⑰ Междубиблотечный абонемент: МБА

(図書館間相互貸借制度。МБА 活動の具体的

内容・実情に関しては、“Советское библиотечное ведение” (ソビエト図書館学誌) 1974年 No.4, 53-61. の《МБА в Латвийской ССР》(ラトビア共和国における図書館間相互貸借制度)に詳しい。ここでは、図書館網の中央集権化とは、現在のところ、図書館サービスの単一システムを実現するための一形態とみなされている。弱小図書館を、より大規模な図書館に統合してゆくことが、図書館の中央集権化の一方法として行われるが、その際生じる読者へのサービスの低下は、このМБАによって、補完、むしろ強化してゆくことが行われているという。

⑮ Культур-поход—культурный поход (文盲清算運動)、ロシア革命後のソ連邦における文化革命の最も重要な要素は、文盲を撲滅する運動であった。1919年12月26日、人民委員会議は、文盲の清算に関するレーニンの署名入りの法令を出した。ソビエト政府は、全ロシア文盲清算特別委員会を設置し、県、郡、郷等に地方特別委員会を作った。1923年文盲清算協会が設立され、また、1929年5月、全ソ連邦共産党中央委員会は「文盲の清算について」という決定をした。1930年には、1,000万人以上の文盲者が教育を受ける等、着実な成果をあげ、1936年頃、事実上、ソ連邦では文盲が解消した。

⑯ Библиотечный поход. (図書館闘争)

1929～30年にかけて、ソビエトの世論の関心を、図書館事業の発展、強化、質的向上等に向けることを目的として、当時遂行中であった第一次国民経済発展5ヶ年計画(1928年～1933年)に呼応して展開された大衆運動である。党組織、コンソモール(共産主義青年同盟)、労働組合、その他種々の社会団体、知識人が、これに参加した。

⑰ Всесоюзный конкурс на лучшую сельскую библиотеку. (より優れた農村図書館をめざす全ソ的競争)

図書館闘争(библиотечный поход)と同様、広範な世論の参加により、農民に図書を供給するという文化革命の主要な課題を推進し、農村の図書館を強化する上で、大きな成果をあげた。

⑱ Орехово-Зуево (アレホーフ・ズエヴォ)

ロシア共和国モスクワ州の Орехов Зуевский 区の中心都市で、紡績業が古くから発達していることで有名な人口約12万5千(1974年)の市である。

この市において、1929年～30年にかけて試みられた単一図書館網の組織化については、“Библиотеки СССР” 1968年, вып. 38, стр. 80-93 の《Пути централизации сети массовых библиотек в современных условиях》(現状における大衆図書館網の中央集権化の進路) Р. З. Зотова 著に詳しい。

「この市で、単一網が創られようとしたことは、図書館史において新しい現象として評価される。かつて諸外国においても、種々様々な官庁、組織の枠を越えて、図書館を単一組織に統合、改組するということが、即ち、支部システムを作り出すことは、公共図書館間にしかみられなかった。しかし、この市においては、様々な機関、組織が、単一網を作り出すことに協力したのである。」(стр. 81) これは、種々の図書館を、中央図書館の支部として位置づけ、市の単一網を作り出し、支部図書館間で図書を循環させることによって、読者の要求に応える。又、図書館間相互貸借制度を活用する。市の中央図書館が、図書館網の行政的・財政的な指導・統制を行い、単一の参考調査業務機関および総合目録の編纂を行う、等を原則として行なわれた。しかしこの試みは、財政的基盤が異なる種々の官庁の統合の困難という制約により、完全な改編には成功しなかった。1929年においては、図書館事業は、まだ低い段階にあったこと、および、中央図書館に図書館網の活動を指導する力が不十分であったことも、その失敗の原因とされている。

この他の試みとして、同論文には、次のように書かれている。

「20～30年代のわが国では、市(アレホーフ・ズエヴォ等)における図書館網の中央集権化と並んで、農村における、区の単一網の実現が試みられた。例えば、レニングラード州では、区における全農村図書館の統合、農村

図書館を区図書館の支部、図書の貸出地点に変えることが目指された。その目的は、a) 図書館網の蔵書を、単一蔵書へ統合する、b) 中央図書館の図書の貸出地点として単一の支部網を設立すること、c) 単一の蔵書目録から、単一目録体系を創り出す、d) 区図書館が、この図書館網の中心として、各支部に図書を供給し、図書館網の指導、監督につとめる、というものであった。

なお、この論文には、1966年のある市における成功例、この問題をめぐる国際シンポジウム(1966年プラハ)、その他諸外国、およびソ連の図書館の集中的体制作りの具体例が述べられ、問題点も指摘されている。こうした制度によって、大規模な図書館を随所に作り出さなくてよい所から、人口密度の低いソビエトの農村地帯では、この制度を発展させることは重要課題であるとしている。

参考文献

1. Крупская, Н. К. О библиотечном деле, сборник. Москва, Гос. Б-ка. им. В. И. Ленина, 1957.
2. Абрамов, К. И. : История библиотечного дела в СССР. Издание второе. Москва, Книга, 1970.
3. Чубарьян, О. С. : Общее библиотековедение. Издание второе. Москва, Книга, 1968.
4. Крупская, Н. К. Что писал и говорил Ленин о библиотеках. Москва, Гос. Б-ка. им. В. И. Ленина, 1955.
6. Ленин о библиотечном деле. Москва, Изд-во политической литературы, 1960.
7. Крупская, Н. К. О самообразовании, сборник, Москва, Гос. Б-ка им. В. И. Ленина. 1960.
8. 「クループスカヤ選集」1～7巻) 明治図書
別巻
9. 「レーニン全集」 大月書店
26巻 p. 339
28巻 p. 484-485
29巻 p. 334
32巻 p. 125-135
10. 「文化革命論」 第2期トロッキー選集16 和田あき子訳 1970 現代思潮社
11. “Библиотеки СССР.” 1968. г., вып 38, стр. 80-93. Зотова Р. В. «Пути централизации сети массовых библиотек в современных условиях»

[ながしま・ななほ 収書部外国図書課]